わが夢見るは遥かなる大地

健部伸明

漆黒の虚無が四方、八方、十六方に割れ、そこから揺らめく虹色の光条が射しこみ、やおら輝く天蓋となる。目が眩みそうだが、そこは有機感応式透明媒体（バイオリアクティヴトランスメディウム）の対宇宙線機能（アンチコズミックレイファンクション）で、すぐ適度な明るさとなった。

紅炎（プロミネンス）をオレンジ色に燃やすK型恒星が脇を通り過ぎると、濃紺の真空を背景に、アイボリー混じりの褐色の円盤が見えてくる。H_2O 分子が形づくる極冠および青白い雲が、よいアクセントになっている。心安らぐ光景だ。すなわちこの単座式の斥候入植艇（スカウトセトラー）《アルリム》は、プログラムされた目的に合致する固体惑星をついに発見し、中でアイスキャンディーよろしくガチガチに凍っていた俺を、優しく揺り起こしつつあるというわけだ。

覚醒もしくは蘇生の過程は、常に瑞々しい。無尽の絶空域（エクススペース）を抜け、棺桶かつ揺り籠もしくは人工子宮ともいえる鉱物生体（ミネラルオーガニズム）のポッド内でゆるりと解凍されていると、まさしく生まれ変わった気がする。かつての世界は前世の彼方。いま目の前に広がる光景こそが現世である。とはいえすぐにも（あるいは意識が戻る前に）天国にも地獄にもなりうるのだ。目覚めることなく死を迎えていた場合、この自分とかいう存在は、果たして消滅してしまうのか、それとも無間奈落をさまようのか？

幸い今まで俺は、そこまでの悲喜劇に陥ったことはなかった。だからこそ、こうして（脳内で）軽口を叩いていられる。

無限かつ一瞬の誘導冬眠の最中、ときに不可思議なヴィジョンが訪れる。特に目的地が近づいたときに顕著だ。ただの夢だと言う者もいる。ところが後で、来世の断片と色々と符合することがわかり、覚えていられればサバイバルに役立つ。俺たちシードリングはそれを、冗談めかして「予知夢」と呼んでいた。

破次元粒子（インプラノン）は、進路方向より域境を超えて侵入し、船体を叩き、ポッド内にまで伝わり、最終的には超伝導体（スーパーコンダクター）と化した俺たち自身の脳髄にまで届く。

そうだ、脳が必要なのだ。より正確にいえば、古来より松果体と呼びならわされている微

小な内分泌器がである。松果体を失った（もしくは機能しない）人間や、そんな器官など初めからないＡＩには、そもそも絶空域を超えるナビゲーションは不可能。入植艇は常にシードリングの松果体をアンテナとし、それを経由して目的の星を探すのである。

予知夢は、そんな絶空域航法の副作用であった。そして予知夢を見る見ないで、生存率や任務の達成率に明確な差が出てくる。

それでも、その夢を百パーセント信用すると痛い目を見る。「そんなこともあろうか」ぐらいに受けとめ、臨機応変に対応するのが古参のシードリングのやりかただ。

意識がだいぶクリアになる。今回、夢は見たような気がするが、はっきりしない。閾下（いきか）に埋もれているようだ。まあ、必要となればフラッシュバックしてくるだろう。

微細な壊死や機器の機能不全などの不具合を二重三重に確認し、再生と修復が完了するまでの時間を、いつものように目的地の分析に充てることにする。

《アルリム》は、既に惑星の周回軌道に乗っていた。地表の風景は、コーヒーに注いだクリームのように目まぐるしく移り変わる。流動する空気がある証拠だ。センサーによる分析でも、大気組成、地表温度、気圧などの諸数値はネガティヴではない。

「汝を《カルアミルク》と命名する」

ダサいとか、《カプチーノ》の方がいいんじゃないか、とかいう意見は即却下だ。シードリングには、入植する星に名前をつける権利が与えられている。まあ名がかぶるといけないので、正式には《タナハタ0035カルアミルク》ということになるのだが。

あらゆる準備が整ったので、覚悟を含め、降下を選択した。《アルリム》は俺ごとポッドを吐き出す。外部センサーに直結された大脳に、立体角三六〇度の死角（パノプティコン）なしの光景が、はっきりと映し出される。外壁がないがごとく、頭上の《アルリム》の鈍色で紡錘形の船体と、足下の砂漠を思わせる《カルアミルク》の楕円を、同時にリアルタイムに認識する。

弧を描く航跡（マヌーバ）。透明な位相（フェージング）シールドを展開。振動、衝撃、赤熱。ポッドは軽く呻きつつ大気圏に突入する。《アルリム》の量子電脳とのリンクで、なかば無意識に姿勢を制御し、最適の角度を保つ。

海など非腐蝕性の大規模な液体があれば、ソフトに着水（スプラッシュダウン）できるのだが、残念ながら見当たらない。タイミングを見てパラシュートを開き、反動場を噴かさなくては。

風が逆巻き、丸い地平線の弧が徐々に長く平坦になる。短時間で闇夜と蒼白な昼が繰り返され、曙光（しょこう）と日没の深紅が脳裏に残る。目的地は、夜明け直後の盆地だ。あるいはクレーターかもしれない。

その多重円地形の中心を着地点と定め、最終噴射を始めた瞬間、強烈な頭痛とともにヴィ

ジョンが訪れ、気を失いかけた。いや、正確には予知夢を思い出したのだろう。その内容は……

抜けるように青かった昼下がりの空に、無数の点が散った。白、黄、赤。色は様々だが、飛行機雲のようにあらゆる方向に航跡を残した。

そのひとつが遥か遠くに落下したかと思うと、赤く火花が散り、大地が揺れた。ふたつ、みっつと落ちる。その爆発からキノコ雲が立ち上がり、隕石のごとき破壊的な飛翔体であることがわかった。遅れて到達したゴゴゴゴッという低音で体が震え、キーンという高音で頭が軋(きし)んだ。逃げようと思ったが、天空の点は網目を成してこちらを睨んでおり、どこにも逃げ場はない。落下点はどんどん近づいてきて、石造りの住居や、聳(そび)え立つ古代の紋様が刻まれた白亜の神殿をなぎ倒し、蒸発させた。大気は黒く熱い煤煙の旋風へと変わり、自分の手が、足が、喉の奥が発火する。痛みと四肢の消失を他人事のように自覚しつつ、炎による世界の粛清が眼窩を焼きつくし、そこで何も感じられなくなった……

轟音。黄色い砂埃。かすかな振動。

再び意識が戻ると、ポッドは五本の生体(バイオ)セラミックの脚とジャイロ機構で、水平を保って大地に佇立していた。たとえシードリングが気絶しても、(深刻な故障でもない限り)《アルリム》の電脳で自動制御された着陸シークエンスに問題が生じるわけもなく、墜落する道理はなかった。それでも五体満足かどうか、順に全身を確認せずにはいられない。吹き出た汗は循環システムが回収し、精製し、体内に戻していく。

全方向視界(パノプティコン)も機能し続けている。それを使って俯瞰すると、辺りの光景にどこか見覚えがあった。

建物も生物も、付近には存在の痕跡は見当たらない。地形も変わってしまっている。しかしなぜか「いま自分がいる地点こそが、さきほどフラッシュバックで体験した夢の視座であったのだ」という確信があった。

ポッドの生命維持システムが、適切な化学物質とホルモンを、対応する受容体(レセプタ)に向けて放出する。俺は徐々にかつ機能的に冷静さを取り戻し、何がどうなっているのか少しずつ考えられるようになった。

自身をポッドから切り離す。全身を覆う外骨格(エクソスケルトン)や装備(アウトフィット)とともに、みずからの足で赤褐色の大地を踏みしめた。砂と粘土の中間の感触。一・二G程度の重力は、この強化された肉

体の負担にはならない。本能と夢の記憶に導かれるまま彷徨(さまよ)い、気になる窪みを見つけてしゃがみこんだ。重なり合う白っぽい巨石が幾つか。自然のものではない。両腕を差し入れ、サーボを働かせてひとつずつ脇にどかす。やがて地面が露出し、周囲とは異なる色彩に気を取られた。紫と赤と黄の繊維状の染み。指先からマニピュレータを延ばし、サンプルを採取する。

ふと気になり、首を動かすと、どかした石の側面に何か記号のようなものが見えた。上向き矢印の十字に二重円。夢のなかで、なぜか神殿だと確信できた建物にも同じ記号があった。

ポッドに戻り、サンプルを分析にかける。すぐに結果は出た。組成は、炭素系生物特有の残存物であった。そして全てを悟った。

「う、うう……」

吐き気がする。こめかみがズキズキ痛んだ。滲(にじ)み出す涙で視界が歪んだ。

あの夢は、この星の未来ではない。実際に過去に起きた出来事だったのだ。予知夢で過去を視(み)るとは、これはいかなるパラドックスなのか？

何世紀も前に滅んだ文明の喪に服していいのは、きっちり三時間と決められていた。ポッドという子宮に戻り、少しまどろんで精神的に復活すると、俺は再び惑星《カルアミルク》の探索と分析に戻ることにした。

さあ、仕事の時間だ。

サンプルをベースに調整された、分子(ナノ)レベルの解析ボットを解き放つ。ナノボットは移動しながら惑星の物質を咀嚼(そしゃく)し、分析し、自己増殖を繰り返す。かつて生命が存在していたと分かった以上、その解明が最優先だ。残存する遺伝子があれば回収し、複製し、補填し、全体像を導きだす。

こうして七日と七晩が過ぎる頃、必要なだけのデータが揃った。理由はわからないが、この星の住人は、我々人類に極めて酷似した種族であった。ならば話は早い。過去には人魚(マーフォーク)や人馬(ケンタウロス)のような合成獣をしつらえなければ、生存が不可能な星もあったのだから。

俺は、自身と《カルアミルク》人のＤＮＡを分子解析にかけ、理論の場である量子電脳と、実践シミュレーションの場であるナノコンピュータの併用で、現在のこの環境に最適な人

体デザインの設計（エンジニアリング）を進めた。そうだ。俺自身の種が、この星の残滓と交わり、新たな種が生まれる。だからこそ俺たちはシードリング、すなわち苗木にして種撒く者と呼ばれているのだ。

とはいえ「俺の遺伝子」と胸を張って言いきるのは難しい。俺自身のDNA鎖は既に調整され、不活性部分（イントロン）に多様な他人や他の生物の遺伝子設計図が組みこまれていた。さらにいうなら、各細胞によってDNAそのものも異なっている。俺はキメラであり、全生命の遺伝子を乗せたノアの箱舟なのだ。

引き続き、細菌や動植物相の設計および再生を進める。そうでなければ新生人類が食うに困る事態となろう。だが実際に住まわせるには、まだいささか環境が過酷だ。もう少し地球化（テラフォーミング）を進める必要がある。

《アルリム》の周回軌道を螺旋状にずらし、何体かサブ機を放って、全地表をサーチできるようカバーする。衛星画像が次々と伝送されてくる。徐々に《カルアミルク》の全地表図が出来あがる。

スペクトル解析の結果、かろうじてまだ残っている遺跡の位置を幾つか特定できた。それらを文明再発生の基準地点と定め、天空からパーティクルと呼ばれる別種のナノマシンを撃ちこむ。パーティクルは内包されたプログラムによって着弾地から資材を集め、有翼多腕多脚で大型の重機（ユン）ボットを構築する。このボットには分子プリンタが搭載され、必要に応じて建材や建物そのものを三次元印刷し、組み上げる。そうやって崩壊した建物や街を（全てではないが）再建する。ギザの金字塔（ピラミッド）クラスの構造物だろうと、図面さえひければ時間の問題だ。そして時間は無限といっていいほどある。どのユンボットも自己再生&修復機能を備えており、全生命の復活にふさわしいお膳立てが済むまでは機能し続ける。そして役目を終えると、自動的に解体される。

こうして、どの生物をどの順番に再生させるかまで含めた全プログラムが完成した。今はまだ、地上で目に見える変化はない。だがシミュレーションは完璧であり、量子レベルの揺らぎで多少のイレギュラーな事態が発生したとしても、この星がやがて生命に満ちたエデンとなることは約束されている。ここでの俺の仕事は終わりだ。

ポッドに戻り、数ヶ月ぶりに反動場を噴かす。上昇し、見る見るうちに成層圏に達する。着陸よりたやすい。《アルリム》に帰還し、サブ機も回収し終えると、この星のプロジェク

ト・リポートを、人類が生息する全星系めがけて絶空域（エクススペース）チャンネルで送信する。この通信もまた、松果体を備えた相手でなくては受け取れない。うまく届いてくれと思う。

シードリングや斥候入植艇（スカウトセトラー）が必要となったのは、宇宙でのあまりにも低い生存確率のせいである。過去の文明が、何度崩壊して何度暗黒時代を迎えたか。そもそも繰り返される生物種の大量絶滅こそが、地質学的な区分線なのである。自然発生した生物が知能を発達させ、度重なる自滅の危機を乗り越え、アインシュタイン的な限界を突破する絶空域テクノロジー開発に至るまでの確率は、まさしく天文学的に小さい。俺たちがこれまで存続できたのは、単なる幸運に過ぎない。それでも居住惑星がひとつであるならば、巨大隕石の落下や天体の気まぐれで発生する過度な宇宙放射線にさらされるだけで、簡単に絶滅してしまう。

そんな危機に瀕したら、別星系の居住可能惑星に移住すればよい。より多くの難民の受け容れ先があれば、文明生存の確率は高まる。またより多くの星に移住すれば、逃げようもなく幾つか滅んだ星があったとしても、種としては他の星からまた拡散できる。こうして人類は、永遠に繁栄を続けられるサイクルを見つけたのである。

マニュアルどおりの全手順を終えた俺は、深い満足感とともに再び永遠のごとき眠りに就くことにした。今いる現世は前世となり、絶空域を抜けた先の来世が、やがて新たな現世となるであろう。その時まで皆さん、アデュー、サヨナラ、グッドバイ。こちらはせいぜい、冥途の夢を楽しむこととしよう……

そもそも、なぜ全ての文明に天界と冥界の神話があるのか。それは実際に存在するからだ。天より降臨した神が、人類や文明を創生する。死んだ人間の魂は天へ召され、冥界へ赴く。その全てを、俺たちシードリングは実体験している。

冥界たる絶空域は、夢の領域でもある。俺たちの夢が、来世で現実となる。《カルアミルク》の復興は、まさしく俺が、自身の大脳と《アルリム》の量子電脳のリンクによって見た、夢のプロジェクトの実現ではなかったか？

かつて何もかも失って自暴自棄になっていた俺だからこそ、志願してこの任務を受け、シードリングとなった。だが今ではこの任務にやり甲斐を感じ、誇りさえ持っている。いつどこで目覚めるかもわからないが、常にそこはシードリングが必要な星なのだ。

だが覚醒の前に、再び予知夢が襲ってきた。前回のように忘れてしまうような、夢かどうかもわからない曖昧なものではなく、明確に夢を見ているとわかる明晰夢であった。

「やあ、やっと気づいたね」

辺りは雲のなかのように靄がかかり、ただ目の前の人物だけが光を放っていた。

「とはいえ、まだ何が起こっているのか理解してはいないようだ」

顔は見えない。声からするに中年男性のようだ。服は白……いや金属質の鈍色(にびいろ)で、一種の宇宙服のようにも見える。
「いや、理解したくないのか。真実から目を背けたいのかもしれないね」
よく見ると、霞のなかにさらに幾つもの人影が見えた。
「でも、さすがにそろそろ、きちんと話すべき潮時だろう」
無限に連鎖する人影。なぜかどの顔も定かではなく、頭の中で反響するその言葉に、心底背筋がぞっとした。
「それでもそれを受け容れるには、心の準備が必要だろう」
すると相手は、そこで話すのをやめ、じっとこちらの出方を伺っているようである。沈黙の時間が流れた。相手の唇はへの字に結ばれているが、それより上の目鼻立ちはよく見えない。
他にどうしようもなく、先頭の人物に恐る恐る声をかけた。
「君はいったい誰なんだ？」
そう問いかけたとたん、その自分自身の声が世界じゅうに反響し、ありとあらゆる方向から聞こえてきた。そして相手の口が開かれた。
「決まってるじゃないか、君自身だよ」

その瞬間、相手の顔を覆っていた靄(もや)は晴れ、確かに鏡で見慣れた自分の顔が現れた。目の前だけじゃない。背後に連鎖する人影すべてが、そうだった。
「そう、我々は無数に存在する君自身なのさ」
当たり前のように、そんな返事が戻ってきた。まったく意味が分からないと同時に、どこかでわかっていた気もしていた。額やわきの下から冷たい汗がにじみ出す。恐る恐る訊ねてみる。
「俺自身が無数に存在するってことは、世界も無数にあるってことにはならないか？」
「ご名答」
食い気味の即答だった。悪い予感が当たった。それはつまり、俺自身が今まで内心恐れていたことが、事実かもしれないことを意味していた。
俺である相手は、皮肉めいた笑みを浮かべた。
「そもそも光速を超えるなどということは、絵空事で実現不可能。そう物理の授業で習わなかったのか？」
「待ってくれ。それは絶対的運命論に基づく古典物理学の話で、量子論が全てをぶち壊した。そこから絶空域の理論も……」
「いや、絶空域で移動するものは時間の矢を反転させ、未来と過去を逆転させてしまう。原因と結果が入れ替わり、過去改変がなされ、結果としてそもそも絶空域テクノロジーが開発されたという事実が失われてしまう。タイム・パラドックスだ。実現不可能だよ」

「だが実際に俺は、何度も絶空域を抜けてきた」
「単なる見せかけだよ。君は君の思ってるような旅をしていたわけじゃない」
「わかるように説明してくれ」
「いや、本当はわかってるだろ。絶空域を抜けた先は、元の宇宙じゃない。極めて似通っているかもしれないが、元の宇宙とは因果関係を共有しない、いわゆる並行世界（パラレルワールド）なのさ」
「え、だって、だとしたら、それは……」
「そう。君は絶空域を抜けるたび、横滑（スライド）りして別の宇宙に出ている。ここが冥界だと習っただろ？」
「いや、それは単なる比喩で……」
「そうじゃない。君は元の世界では存在をやめ、いわば本当に死んでいるのさ。そして新たな宇宙に新たな存在として再誕する」
「だとしたら……」
「そう。君が元いた宇宙では、人類は既に滅んでいるだろうね。君は毎回、別の宇宙に種を撒いているだけで、自分の宇宙を救うことなんかできないんだよ」
「そんな、まさか、そんな、でも……」
「認めたまえ。それが事実だ。だからこそ今一度問いかけよう。こんなことをいつまで繰り返すつもりなんだ？」
「それは……」
俺である無数の相手の表情が曇った。と同時に、最初の時のように顔が見えなくなった。何もかもが光に覆われ始めた。意識も遠のいていく。
「自分自身の心に、きちんと答えを出す頃合いだよ。なあ……」
それが、そこで最後に耳にした自分の言葉だった。自分も相手もない。既に全員がひとつに融合していた。どこにも逃げ場などなく……

ポッド内で、何度目かの目覚めが訪れた。覚醒時、こんなにも明確に夢を覚えていることなど今までなかった。まだきちんと動かず、半凍結している肉体のあちこちに、引き裂かれるような痛みが伝わってきた。
《アルリム》の量子電脳が危機を察知し、解凍より治療／修復に重点を置くサブルーチンを働かせたようだ。パニックの波は徐々に去り、俺の生体脳はより論理的に思考するモードへと移行していく。
夢は夢だ。それは示唆であり、必ずしも事実ではない。
とはいえ確かに俺は、絶空域から通常宇宙に移行する際、時折わずかな違和感を覚えていた。その理由はしかとはわからなかった。感覚は理屈では説明しがたい。ただこれに似た感覚には覚えがある。家に帰ったとき、わずかに椅子の位置や机の上の本の角度が変わってい

る。誰かが侵入してきて手を触れ、位置を動かし、それに気づいて戻して去ったけれど、完全には元の位置には戻っていない。そんな感じだ。あるいは袖を通してみてから、同じ服だと思っていたのに、若干サイズやデザインの違うジャケットだったような。

今までは、他の多くの共通項に目を向け、些細な違いには目を瞑(つむ)って、自分の気のせいにしてきた。だがあの夢は、その違和感に理由と説明を与えてくれた。だとしたら、それが事実かどうか、何らかの方法で確認できないものだろうか？

そう思っているうちに、あたりの景色は変転した。至極当然だ。通常空間に出て叩き起こされたということは、入植すべき星があるということなのだから。

星系の主星はG型で、懐かしい黄色のスペクトルを発していた。生存可能域にある惑星は、緑と赤の二色のコントラストが印象的である。《アルリム》は刻一刻とその星に向かっている。ここはまず、自分のアイデンティティ・クライシス的な疑問は後回しにして、任務に戻った方がいいだろう。

そう思って全方位視覚(パノプティコン)を起動したとたん、違和感で鳥肌が立ち、ありえない光景が飛びこんできた。周回軌道に、たくさんの船が浮かんでいたのだ。幾つかはこの《アルリム》と同じく斥候入植艇(スカウトセトラー)だが、より巨大な一万人規模の乗客を運ぶ輸送船(トランスポーター)も一ダースはいた。さらには見たこともない形状で用途不明の異形宇宙船が、あちこちにいる。

すると目の前にいた一隻の異形船の船腹に、多数の穴が列をなして開き、そこから飛翔体や光線が飛び出した。虹のごとき煌(きら)めきが複数の船のあいだで飛び交い、爆発し、球形の炎とジェット状の噴射が生まれた。閃光。轟沈。消滅。あれは戦闘艦艇(ウォーシップ)だったのだ！

すぐさま反撃が始まり、軌道は美しくもおぞましき火炎地獄と化した。意図してか巻き添えかはわからないが、無防備な輸送船も次々に火だるまとなった。

さらには惑星表面からも次々に火の手が上がる。地上基地から撃ちあげた軌道高射砲や弾道ミサイルなのか、あるいは軌道側から撃ちこまれた質量兵器や核兵器なのか、あまりにも多数の爆発に区別がつかない。

《アルリム》の対宇宙線機能(アンチコズミックレイファンクション)がフル活動しても、その眩しさが網膜を焼かんばかりであった。一瞬、《カルアミルク》到着直前に見た不穏な予知夢が思い起こされた。

この阿鼻叫喚から逃げ出せるとしたら、機動性に優る小型艇のみだろうか。

俺は理性をかなぐり捨て、生存本能に従って反射的に艇を操り、他の艦艇の残骸を盾に、残る戦闘艦艇から死角に位置するよう立ち回った。こちらは非武装なので生きた心地はしなかったが、俺じゃない俺たちが語った夢によれば、既に何度も死んでいる身だ。死にたく

ないという想いと同時に、どこかで自分は死なないのではないかという、妙な確信もあった。
やがて地上が暗雲（フォールアウト）のなかで沈黙し、軌道でも破滅の光が消え去ると、宇宙空間は墓場のような静寂に満たされた。あまりに多くのことがものすごい速度で起きたため、どういう流れなのかは《アルリム》の航宙レコーダーをじっくり解析してみないとわからないが、ともかく全ての戦闘艦艇は沈黙していた。
いま目の前で、少なくとも数十万人の命が無意味に失われた。いや、地上からの反撃を鑑みるに、数億人規模のジェノサイドであったとしても不思議ではない。自分はいったい何をしていたのだろう？　逃げるだけで何もできなかった。だが、何かできただろうか？
そのとき《アルリム》が、一隻の船の接近を知らせてきた。生き残りの戦闘艦艇であったなら、ひとたまりもない。一瞬死を覚悟したが、識別された船種は同じく斥候入植艇だった。画像を拡大すると、舷側に《Narmer》というアルファベットが見える。
そこで先方から絶空域を通じて入電があった。敵か味方かわからない状態なので躊躇しないでもなかったが、状況が何も呑みこめていないため、喉から手が出るほど情報が欲しかった。
回線をつなぐことにした。現れたのは、顎がしっかりした赤毛でショートカットの女性の映像だった。
「生きてる？　こちらはハンターシーカーのカタリナ・ヴァーゼムスキ。カーチャでいいわ。そちらはどなた？」
え？　ハンターシーカー？　シードリングじゃないのか？
とはいえ、彼女が話しているのは既知の言語だ。
「サトル・タナハタ。サトルでいい。こっちはシードリングで、何とか生きてるよ。どうやら一番最後にここに着いたらしく、何が起きていたのかまるでわからない。よかったら知ってることを教えてくれないか」
「そうなの？　シードリング？」
解せない顔をしつつも、カーチャは先を続けた。
「っていってもどこから説明したものか……」
眉根を寄せる困り顔をチャーミングだと思ってしまったのは、ここ何年（何十年？　何百年？）も、異性どころか生きている人間に逢ったことがないせいかもしれない。
カーチャは、ともかく最初から話すしかないと決めたようだ。
「銀河が爆発したのよ」
「え……」
愁いを秘めた紺碧（こんぺき）の瞳に、冗談を思わせる色はない。
「中心核のブラックホール近辺で超新星爆発（スーパーノヴァ）があって、それから予想外の速度で連鎖的に

いくつもの星が不安定になり、その結果ね」
「とはいえ、波及速度は秒速三十万キロを超えることはないから……」
絶空域テクノロジーが確立され、事前に移民船を用意できている文明なら、銀河が爆発に至る前に充分に対応できる事態ではなかろうか？
「そう思うでしょ？　ところが付近の多くの星が、ほぼ〝同時〟に影響を受けた」
「偶然にしては出来すぎだろ。とはいえ光速を超えて因果関係が発生するだなんてこと……」
ありえない、と言いかけて舌が動かなくなった。カーチャは俺の表情から何か悟ったらしく、溜め息交じりに頷いた。
「ええ、量子もつれ（エンタングルメント）よ。最初の超新星と、影響を受けた他の星々の間には、量子もつれが形成されていた。だからどれだけ離れていても、同時に進行した」
「ちょっと待ってくれ。そもそも量子もつれが発生するには、初期状態として互いの量子がほぼ同じ位置にいる必要がある。そんなに離れた恒星同士なんかでは、ありえない」
「コワルスキー的にはね。退光波（レトロフォトン）技術が全てを変えてしまった。あれは二点間の距離をゼロにするのに等しいテクノロジー。余りにも多くの超光速粒子（タキオン）を飛ばしすぎた副作用で、居住可能惑星のある全星域が量子的につながってしまったの」
「そんな馬鹿な……」
細かい単語の意味が微妙に不明だったが、大筋はつかめた。
「私だって、そう思いたかった。でもそれが真実だと知った時にはすべてが遅かった。ともかく、皆それぞれ母星（ホームワールド）を飛び立ったの。けれどそんな状態だから、影響を受けない居住可能惑星の数には限りがあって、少ない星に多くの難民船が集結した。むろん、受け容れのキャパは超えていたわ。そこで血で血を争う艦隊戦……というか、強者による弱者の虐殺が始まったの。結果、さらなる星が死滅したわ」
背筋が凍った。
「そんな馬鹿な。人類は互いに争うことをやめ、絶空域航法（エクススペース）を駆使して、結束の時代を迎えたんじゃなかったのか？」
カーチャはさらに表情を曇らせ、一思案した後でつぶやくように言った。
「どこの理想郷の話？　人類が戦争をやめることができたなんて、歴史上一度もないわ。それにエクススペースって何？　退光波（レトロフォトン）技術と何か関係があるの？」
今度はこちらが唖然とする番だった。

レトロフォン？　カーチャが口にするのは、これで二度目だ。知らない概念だが、逆にカーチャには「絶空域」という単語がピンと来ていないらしい。互いに超光速テクノロジーを確立していればこそ、この星域で出逢うこともできたわけだが、ボタンを掛け違えたような齟齬感がある。そういえば他にも、コワルスキーとか、ハンターシーカーとか、微妙に意味がずれている単語が交わされていた……

「もしかして、通常空間に出るたび、別の宇宙にスライドしている……」

思わず独り言が漏れた。結束の時代を迎えることがなかった宇宙。絶空域航法とは異なる理論で超光速を実現した宇宙。それがカーチャの宇宙なのか？

「ああ、多元宇宙（マルチヴァース）理論ね。そういうこともありうるわね」

カーチャは妙に腑に落ちたという顔をしている。

「え、君はその理論を受け容れているのか？」

「受け容れるも何も、それが事実なら、それに従って生きるしかないじゃない？」

「それは確かにそうなんだろうけど……」

俺はそこで「結局は自分の宇宙を救えていなくて、因果律的には無意味な横滑りを繰り返しているだけではないか」という、愚痴に近いさっきの夢の話をしていた。俺は絶望していたのだ。そして話せば話すほど、カーチャに呆れられる、あるいは見捨てられる……胸のなかが、そんな暗い想いで満たされていく。

ところがカーチャは片手で髪を掻き上げると（ポッドのなかで実際にはそんなことはできないが、彼女の心のイメージがそうだったのだろう）、思いのほか優しい口調になった。

「サトル、あなたはもしかして時空円環理論を知らないのかしら？」

「え、円環？　なんだいそれは？」

カーチャの瞳に、悪戯小僧のような光が宿った。

「どうせ、無限の宇宙（ヴァース）があるって言われたんでしょ？」

「あ、ああ」

俺たちの宇宙（あるいは例の悪夢）では、それを並行世界（パラレルワールド）と呼んでいた。

「でも、本当の無限なんか存在しないのよ」

「え……」

「マルチヴァースだって、この宇宙と同じで、果てはないけれど有限なの。まあ、初期条件によるのだけれど、そういうこともありうる。要するに曲率の問題で、果ての果てまで行ったら、結局は最初の場所に戻って循環するってわけ」

さも当然という顔。確かに、そういう理屈も成り立つが……

「ちょっと待って、カーチャ。それがもし本当なら、ある宇宙から隣の宇宙に移行して起こした事件は、その宇宙での原因となって新たな結果を生む。そしてその宇宙からさらに別の

宇宙にスライドして事件を起こしたら……」
「そうよ、サトル。そうやって無限にスライドを繰り返したなら、最終的には最初の宇宙に影響を及ぼすことができる。私たちがすることは無駄なんかにはならない」
その言葉を、心底信じたいと思った。それが真実であればいいと願った。
「けどそのかわり、自分の知らない自分がしでかした事件を、別の自分が尻ぬぐいしなければならない……ってこともありうるわ。マルチヴァースを超えて情報が送られるとき、夢で感知することもある。そういう経験って、ないかしら？」
「そりゃ、何度もあるとも。だって……」
そこまで言って、舌がピタリと止まった。この惑星軌道での大戦闘と、《カルアミルク》で見た予知夢の光景が再び重なる。《カルアミルク》を滅ぼしたのは、誰なんだ？　なんであそこに人類の亜種がいたんだ？　もしかして、この惑星と同じような虐殺や戦闘があって、別の世界の自分がその当事者だったとしたら……
俺があの星に破滅の種を撒いたのか？
「どうしたの？　死に神にでも遭ったような顔をしてるわね。こんな天使みたいな女の子をつかまえておいて失礼な話ね」
瞳が悪戯っぽく笑っている。
シードリングの所業は神の真似事だ。カーチャの言うハンターシーカーがシードリングに類する役職ならば、神の御使いという表現は、あながち間違っていない。
「いや、君じゃない。俺こそが死に神だったのかもしれない……」
カーチャはそこで鼻を鳴らした。
「あれ？　もしかして別のヴァースの自分の行動に思いを馳せて、落ちこんじゃってる？」
「え？　どうしてそれが？」
「私にも昔、似たようなことがあったからね。でも、別のヴァースの自分は自分じゃないわ。あなたが責任を感じる必要はない。ともかく、自分が今置かれたヴァースで、最善を尽くす。それで巡り巡って、すべてがうまくいく道筋がつく可能性が出てくるでしょ？」
「……すごいな、君は」
彼女は本当に天使か何かなのかもしれない。少なくとも俺にとっては救いの女神だった。
「感心してないで、ちょっと手を貸してくれない？」
え、どういうことだ？　何か困りごとでもあるのだろうか？
「実は一隻、うまく攻撃を逃れて生き延びた輸送船があるのよ。私たち以外では、この星系で最後の生存者」
そう言って、カーチャは映像を転送してきた。あちこちに穴が開いてはいるが、真空漏れは既に塞がれ、確かに内部に多数の有機反応が認められた。
「こんな派手に被爆した惑星じゃ、しばらく入植は無理。でもあれだけの図体の船にあれだ

けの人数となると、私ひとりじゃナビゲートできる自信がないのよ。お願いだから、互いに上生体をリンクさせて一緒にジャンプしてくれない？　ひどい戦闘の生き残りどうし、一緒に理想の星を探しましょう？」

誰がそんな誘いを断ることができるというのか？

「仰せのままに、女神（マイ・ディーヴァ）さま」

そう言ったものの、互いのテクノロジーの違いは航法のさまたげになりはしないだろうか？

「助かるわ（スパシーバ）、サトル」

とたん松果体を通じて、カーチャから退光波（レトロフォトン）航法のイメージが転送されてきた。その瞬間、彼女の言う上生体こそが、松果体のことだと悟った。俺もまた、この双方向のチャンネルを通じて、カーチャに絶空域（エクススペース）の理論を送った。

しかし、向こうの面妖な超光速理論には驚かされっぱなしだ。あの難攻不落の難問にこんな解があったのかと唸らされ、こちらの常識を捨て、一から学ぶ気持ちで取り組んだ。そうして理解が進むうち、破れ鍋に綴蓋（とじぶた）というか、互いの理論が実は表裏一体であり、同じコインの別側面であることと悟り始める。なんとか互いの船同士の航法システムを連携させられそうだ……

それはよかったのだが、互いの深いレベルでのリンクの副作用のせいか、カーチャの半生までが注ぎこまれてきた。

走馬灯のごとく脳裏に映し出される体験。

幼少時にロケットの発射を見て宇宙に憧れを持ったこと。

父親の勤務している星（ズヴョーズドヌイ・ゴロドク）の都に連れて行ってもらい、自分こそは人類の先駆けとして飛ぶのだと決心したこと。

それから大戦があり、破滅の際で退光波（レトロフォトン）航法が開発されて……

「ああ」

カーチャの愁いを帯びた表情。

さっきも言った通り、このチャンネルの通信は双方向だ。とするなら、カーチャもこちらのテクノロジーを学ぶと同時に、俺の人生を覗きこんでいたのだ。

とたんに自分の生きかたが何とも恥ずかしく思え、また逆に女の子の秘密の部屋に土足で上がりこんだような気まずさもあった。

ところがカーチャが口にしたのは、それとは別のことだった。
「私たち、みんな一度……死ぬのね？　そうなんでしょ？」
どうやら彼女は、夢の中の無数の俺とも遭遇したらしい。
「ああ、そうか。そうだよ。ここは前世になる。そして来世が現世になる。君が別のヴァースって呼んでる宇宙のことだけど」
心配いらないと念を送る。深い部分でつながっているため、見る間に彼女の表情が和らいでいく。そんなカーチャのアルカイック・スマイルを見ているだけで、どこまでも行ける気がしていた。
「……わかったわ。私たち生まれ変わりましょ」
言うが早いか、カーチャは輸送船の航宙士（ナヴィゲーター）にもリンクを飛ばし、三隻の同期をとった。
第三の人物（アジス・アブダビという名だったが）の思考が雪崩（なだ）れこんできた。咄嗟（とっさ）に警戒する。
だが彼はただ、凍結の眠りのなかで何が起きたか知る由もない乗客の安全を、第一に願っていた。
「大丈夫」
俺がそう言うと、カーチャもこう同意した。
「何もかもうまくいくわ」
それまでダメージ・コントロールに追われて相当参っている様子のアジスだったが、数瞬後には準備が整い、確信と共に操舵回路へと手を伸ばした。
「わかりました。行きましょう、死と夢幻の彼方へ」
こうして宇宙が変異した。俺たちは虹色の別世界に滑りこみ、同一の温かい調和の夢のなかへと沈んでいった。
行く手にどんな宇宙が待ち受けているのか、誰も知らない。だが一つだけ確かなことがあった。
俺たちはもう、独りぼっちではないのだ。